

小学生へのフォニックス指導の有効性

—小学校 5,6 年生へのフォニックス指導の実践(アクションリサーチ)—

The Effectiveness of Teaching Phonics to Elementary School Students: Action Research for Fifth and Sixth Graders

キーワード: 小学校英語教育、フォニックス、早期英語教育

山見 由紀子
YAMAMI Yukiko

1. はじめに

新学習指導要領の実施により、2011 年度から小学校 5,6 年生は必修科目として「外国語活動」教育を受けることになった。本活動の目標は「外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。コミュニケーション能力を伸ばすことが小学校外国語活動の大きな目的であると示した。そして、2013 年 12 月に文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方」の構想を示した。この構想の柱の一つは小学校英語の教科化である。この構想では 2020 年の東京オリンピックを見据え新たな英語教育が本格展開できるように体制・整備を整え「小学校中学年から活動型の英語教育(週 1~2 コマ程度)を行いコミュニケーションの素地を養い、小学校高学年からは教科型の英語教育(週 3 コマ程度)を行い初歩的な英語の運用能力を養う」とし、2014 年度から逐次改革を推進すると発表した。

このような英語教育政策の変化を受け、より多くの親が我が子に幼い頃から英語教育を受けさせたいと駆り立てられるようになった(Yamami,2013)。ベネッセ子供英語教室では、2012 年に生徒数が前年度に比べ倍増し(Toi,2013)、親の要望の高まりをうけ個人子供英語教室の数は急増している(市川,2012)。2020 年を見据えた英語の教科化の動きにより、子供英語教育の低年齢化、拡大が予想される。早期英語教育の広がりの中、フォニックス指導は個人英語教室を中心に盛んに行われ、3歳児からフォニックス指導を行うと掲げている英語教室も数多く存在する(Yamami,2013)。

グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力を獲得するためにも、小学校段階から英語を言語としてしっかり育てる必要がある(アレン,2012)が、日本の早期英語教育で盛んに行われているような学習開始時からフォニックス指導を行うことは、はたして有効なのだろうか。この疑問に焦点をあて、本稿では小学生へのフォニックス指導の実践に言及し、日本の小学生へのフォニックス指導の有効性の一考察を行う。

2. フォニックス

フォニックスとは英語の文字とそれに対応する音の関係を教える指導法であり、アルファベット 1 文字もしくは 2 文字に対応する音を教えることで子供たちは文字と音の対応を知り、単語を構成している 1 つずつの文字を音声化することによって、単語を読むことができるようになる(アレン,2012)。フォニックスは既に英語で聞き話すことが出来る子供達が、一つ一つの文字と音の関係を学ぶことにより、読み書きができるようになる指導法である(Yamami, 2013)。フォニックスには Analytic Approaches (子供が知っている単語を扱いその単語に含まれる音素を教える)、Synthetic Approaches, Orton-Gillingham Approaches (それぞれの文字とその名前と音を教える)、Direct Instruction Approaches (最初は文字の音だけを教える、文字とその名前は学習しない)と様々なアプローチがある。その中で、Synthetic phonics は一番学習効果が高いと報告されている(Stahl, 2002)。Synthetic phonics は子供達が文字と音の関連を学び、その後明示的にそれぞれの音素を混ぜて一つの単語を作るように指導を受ける方法(例:/s /, /u /, /n/ を合わせて sun と発音する)である。

日本の個人英語教室のカリキュラムは、学習開始時(早くて 3 歳)から 26 文字とその音についてフォニックスを通して指導しているという所が多い(Yamami,2013)。日本人の子供が英語を学ぶ場合は、英語を外国

語として学ぶのであり、英語で聞き話すことは出来ず、初めて英語を聞くことから開始する。フォニックスは、既に英語で聞き話すことが出来る子供達に読み書きを指導する方法であり、日本の子供達が学習開始時からこの指導を受けることの有効性は疑問視される。外国語として英語を学ぶ日本人の子供たちは、何から学ぶのが効果的なのか、考えていく。

3. 音韻認識能力

フォニックス指導は、英語で既に聞き話すことが出来る子供たちが、音と文字の関係を学習することにより、読み書きが出来るようになる学習法である。外国語として英語を学ぶ日本の子供たちは、フォニックス指導を行う前に、学ぶべきものと予想される。アレン(2012)は「フォニックスは文字と音の関係を教える指導法で、音とは音素のことを指し、音素レベルで音を認識できない日本人にとっては、フォニックス指導はルールだけを覚えなくてはならない辛い指導である」と指摘している。従って、フォニックス指導の前に、音素レベルで音を認識する能力(音韻認識能力)を上げることが必要となる。

音韻認識能力(phonological awareness)とは、音素認識能力(phonemic awareness)ともよばれ、単語の音を理解しそれを操ることができる力を指す。例えば「rain, rug, leg, red」という単語の中で最初の音素が違う単語がどれかを選択できるような力である(アレン,2012)。第一言語習得の研究では、音韻認識能力とリーディング能力の関係について、音韻認識能力が後に発達するリーディング能力を予測するといわれている(Mann, 1991; Wagner & Torgesen, 1987)。幼少時から高い音韻認識を持つ子供は、成長して学校での本格的な読み書きの教育を受ける際に、高いリーディング能力を持つようになる可能性が高い。逆に、音韻認識能力が低い子供達は、読み書き能力も低くなる可能性が高い。アメリカでは the National Research Panel が、子供達の読み書き能力の向上には、音素認識能力を上げる明示的な指導が、非常に有効で継続的な効果をもたらすと結論づけた(Adams, 2002)。

一方、第二言語として英語を学習する日本人にとっても、先に音韻認識能力を上げることが不可欠と言えよう。音韻認識能力を上げるためには、良質の英語のインプットを十分に確保することが重要であり、その中で、音素を聞き分けるような音素認識能力を上げる活動を入れていくことが必要である(アレン,2012)。従って、フォニックス指導の前に、音韻認識能力を上げることが不可欠であり、日本人の子供たちが英語を学び始める際には、音韻認識能力を上げる活動を行うことが重要である。

4. 子供の認知的発達理論

Piaget(1973)は子供と臨床的にかかわり、詳細な観察と独創的な数多くの実験によって子供の認知機能の発達理論を提唱した。子供の思考(認知機能)は子供と環境の相互作用、すなわちその子供はそれまでの枠組みでは対処できない不均衡の状態に陥った時に、枠組みをより高度に洗練し、対処可能な均衡状態へと移っていくことで発達していくとした。ピアジェは子供の思考過程(認知機能)の発達段階を以下の四つに分類した。

第一段階は、感覚と運動が直接的に結びついている「感覚運動期」と呼ばれ、0歳から2歳に当てはまる。この段階は、見たり聞いたり触ったりという感覚やつかんだり落としたり噛んだりといった運動によって外界を知るため、外的活動を起こし得ないもの、例えば隠されてしまった玩具などは知る術を持たない。第二段階は、認識の仕方が活動から操作へと発達していく移行期で「前操作期」と呼ばれ、2歳から6歳に当てはまる。この段階では、ごっこ遊び、描画、言語といった行動が現れ、言語が思考に介入し始め推理も生じるが、知覚に支配されていて直観的である。また、この段階は物の見かけが変わるとその数や量も変わったと判断したり、他の人も自分と同じように見たり感じたりしていると考え、自己中心性が特徴的である。第三段階は、具体的に理解できるものは論理的操作を使って思考する「具体的操作期」と呼ばれ、6歳～11歳に当てはまる。この段階では、高さや重さで物を系列化することはでき、保全の概念(物の見かけが変わっても数や量、長さは同じであることを理解する)も確立するため、以前のように知覚に惑わされることも少なくなるが、具体的な対象を離れると論理的に思考することが出来ない。この段階は、実際に手にしている、今ここにある物に関心がある。第四段階は、発達の最終段階で、具体的な現実から離れて抽象的、仮想的に思考する「形式的操作期」と呼ばれ、11歳～16歳に当てはまる。この段階では、理論的、分析的な思考が行われ、具体的な事

例は不要となり、抽象的な思考をし、様々な角度から物事を解決しようとする。

子供の教育を考える上で、子供の認知的発達段階を踏まえ、その発達段階に適した学習を行うことは重要である。

5. アルファベット文字指導

小池(1994)は、小学校 5,6 年生は形式的操作期にあたり、言語の法則や文の構造に興味を持つので、英語の文字指導が有効的に行われる年齢であるとした。また、小学校 5,6 年生は大文字・小文字指導、文字と音の関係を指導することに適しており、明示的に音と文字の指導を確実に行うべきであり(アレン,2012)、小学校 5,6 年生でアルファベット文字と、文字と音の関係を学習した生徒は、中学 2 年時点で、未学習の生徒よりも英語の読み書き能力が高く、英語を話すことに自信を持っていた(アレン,2014)。小学校 5,6 年生に対し、スペルと発音の関係を詳しく説明し練習した結果、文字が難しいというよりも「面白い」とした生徒が多かった(大岩、赤塚、2011)。従って、形式的操作期にあたる小学校 5,6 年生は、アルファベット文字の読み書き、文字と音の関係を効果的に学ぶ年齢であり、フォニックス指導に適している年齢と考えられる。

6. 本研究

6.1 本研究の実践の目的

本研究では、小学校 5,6 年生へのフォニックス指導の有効性の一考察を行うため、アクションリサーチを実施した。アクションリサーチとは、現在の指導現場で起きていることを把握し、その指導法を改善する事である(Heigham and Croker, 2009)。本研究対象の個人英語教室の指導現場で起きていることを把握したところ、小学生全学年に対して同じ時間のフォニックス指導を行っていることがわかった。しかし、フォニックス指導の前に音韻認識能力を上げる必要があること、子供の認知的発達に合った指導が重要であること、アルファベット文字とフォニックス指導は小学校 5,6 年生が適していると考えられることから、指導法を改善する必要があると判断した。本研究では、小学校 5,6 年生クラスで集中的にフォニックス指導を実施し、その効果を考察することを目的とする。

6.2 参加者

本研究の参加者は、個人英語教室(名古屋市)に通う小学校 5,6 年生、計 8 名である。英語の授業は週一回 60 分、1 クラス 4 人の少人数グループで行われ、すべての授業は日本人英語教師(筆者)が実施した。各生徒は、英語教材とその CD、ワークブック(アプリコット社 *Learning world*)を購入し、CD を聞いてくることが学習開始時から毎週宿題として出されている。参加者(8 人)のうち、A,B,C,D,E は小学校 5 年生で、全員 5 歳から筆者の英語教室に通っている。F は小学校 6 年生で、小学校 4 年生の時に筆者の英語教室に通い始めた。G は小学校 6 年生で、4 歳の時に別の英語教室で英語を学び始め、小学校 4 年生の時に筆者の英語教室に移動した。H は小学校 6 年生で、小学校 3 年生の時に別の英語教室に通い始め、小学 5 年生の時に、筆者の英語教室に移動した。

6.3 指導の実践時期と形態

小学校 5,6 年生クラスへのフォニックス指導には、フォニックスのアプローチの中で一番学習効果が高いとされる Synthetic Phonics を用いた。もともと授業の最初に 10 分間で行っていたフォニックス指導を 20 分に増やし、フォニックスを集中して指導していくことで生徒たちにどのような変化があるか、授業の様子を撮影し、授業後に分析して観察記録をつけ、授業内の生徒たちの発言や行動を詳細に記した。(2013 年 9 月～2013 年 12 月 15 週・全 15 回)。

6.4 指導内容

アルファベット表を使用し、英語の文字とそれに対応する音の関係を詳しく説明、練習した。次に、アルファベット小文字カード、3 文字単語カード、3 文字単語ビンゴを使用し、英語の文字とそれに対応する音の関係を確認し、音を組み合わせる 3 文字単語を読む練習を行った。その後、英語で書かれた本を読む指導した。

6.4.1 アルファベット表(1～5週)

英語の文字とそれに対応する音の関係を説明するため、アルファベット表を使用した。アルファベット表の小文字 a-z の 26 文字を指し、アルファベットの文字の名前を確認してから、その 26 文字と音の関連を説明、練習した(例: A says /a/, /a/, ant)。l と r、v と b は、日本人小学生が一番弁別できない音(大岩・赤塚、2011)であることから、調音法を示し、繰り返し発音練習を行った。また、アルファベット表に、th, sh, ch の文字を加え、2 つの文字で 1 つの音を出すこと、その調音法を指導し、その音を含む単語で練習を行った。(例: th [ð]: this, that, father, mother, brother, th [θ]: three, thank you, thirsty, Thursday, sh [ʃ]: sheep, shirt, ship, wash, ch [tʃ]: chicken, chocolate, cheese)

6.4.2 アルファベット小文字カード、3 文字単語カード、3 文字単語ビンゴ(6～10週)

アルファベット小文字カードを使用し、文字と音の関連を確認し、定着させる活動を行った。小文字カードを並べ、音を聞いて対応する文字カードを取り、カードを 3 つ並べ 3 文字単語を作り、音を足して単語を読んだ。3 文字単語カードを使って、音の足し算をして英単語を読むことを繰り返し行った。次に、3 文字単語ビンゴゲームを行った。3 文字単語ビンゴは、生徒が 9 マスのビンゴシートに、指定された 15 個の 3 文字単語の中から好きなものを書き、じゃんけんで勝った者から、ビンゴシートに書いてある単語を順番に一つずつ言って○をつけていく。早く全部のマスに○がついた生徒が勝ちとなる。例えば、あるマスに、dog と書いた生徒は、自分の発言する番に d, o, g (アルファベットの名前よみ) dog と言う。3 文字単語ビンゴを繰り返し行い、アルファベット文字の名前、音の足し算による 3 文字単語の読みを練習した。

6.4.3 多読教材(11～15週)

英語の本を読むことの有効性に言及する研究は多く、アレン(2012)は子供たちがベーセル・リーダーや原作をリライトしたものを使いながら一冊でも多くの本を読む経験をすることが大切であると述べた。本実践では、11 週目から多読教材(アプリコット社 *Spring board*)を使用し、子供たちが自分で英語の本を読むことを推奨した。*Spring board* は、レベル別に分かれており、レベル 1 から 5 を使用した。子供たちは、レベル 1 (一頁に一行の英文)から音読し、それぞれ自分が読めるもの、読みたいものを選択して読み進めた。多読教材表を作り、子供たちは、読んだ日付、タイトル、感想(日本語可)を記録した。

7. 結果

小学校 5,6 年生に対し、フォニックスを集中して指導していくことで、生徒たちにどのような変化があるかを観察し記録した。

アルファベット表を使った 1-5 週目の授業中の生徒の発言は以下の通りである。

- /f/, /v/ は口が、かゆくなる。
- (/p/, /t/, /k/ の練習の後) 英語は、息がすごくでる。
- 日本語って口を開けないね。英語はたくさん口を開けるね。
- 英語を発音すると口が疲れる。
- 英語って(口を大きく開けるから)腹話術できないんじゃない？

アルファベット小文字カード、3 文字単語カード、3 文字単語ビンゴを使った 6～10 週の授業中の生徒の発言は以下の通りである。

- d, u, g, bug, あれ、b だっけ？ d だっけ？ b と d がごっちゃごちゃ。
- (26 小文字アルファベットカードを前に) カード並べて単語作りたい。できた、できた、r, e, d, red, p, i, n, pin, b, a, g, bag.
- 3 文字単語ビンゴが面白い。ビンゴやったら英語が読めるようになった。
- 3 文字ビンゴまたやりたい。
- r, e, d あれ、l, e, d (アルファベット読みで、r と l の言い間違い)どっちだっけ？

多読教材を使った 11～15 週の授業中の生徒の発言は以下の通りである。

- ・英語の本を読むのが楽しい。英語の本を読めるのが嬉しい。本をもっと読みたい。
- ・フォニックス習ったから英語の本を読めて当然。
- ・(本の中に *ride* を見つけ)なんで *ri-de* じゃないんだ？

上記の発言を受けて、12 週目の授業で全員にマジック e (サイレント e) の法則 (語末に e がつくと直前の母音の発音がアルファベット読みになる) の説明をした。bike, hide, side, nine, fine, cake, gate, game, lake の単語を見せ、語末の e を指し、その直前の母音がアルファベット読みになることを明示して発音練習を行った。

- ・shake は “*sha-ke*” じゃない shake だ。マジック e 面白い。
- ・ride a bike は “*ri-de*”, “*bi-ke*” じゃないんだ。感動的。

8. 考察

小学校 5,6 年生に対して、フォニックスの集中的指導を行ってから、英語の文字への興味が大きくなり、英語を読む意欲が出て、英語の本を読みたい、本を読むのが楽しいとの発言が増えた。この結果は、大岩・赤塚 (2011) の研究で、小学校 5,6 年生に対しスペルと発音の関係を詳しく説明し練習した結果、文字が難しいというよりも面白いとした生徒が増えたこと、とも一致する。文字を学んだことで、文字への興味が高まり、自分で英語を読み進める意識が出来たと言える。英語学習そのものへの興味関心も高まったようで、今まで毎週出していた英語教材の CD を聞く宿題にも、以前より意欲的に取り組むようになった。従って、小学校 5,6 年生へのフォニックス指導は効果的であったと言える。一方、本調査の小学校 5,6 年生は全員 2 年間から 5 年間の英語学習歴があり、音韻認識能力がある程度上がっていたために、フォニックス指導が効果的に行われたとも推測される。英語学習歴がない小学校 5,6 年生へのフォニックス指導の場合に、同様の効果があるかどうかは、更なる調査が必要である。

9. 結論

本実践の目的は、日本の小学校 5,6 年生にフォニックス指導が有効であるかを考察することであった。フォニックスは英語の一つ一つの文字と音を結びつける指導法であり、フォニックスを行うには、先に音韻認知能力を持つことが不可欠である。音韻認識能力を上げるためには、十分なインプットを行うことと、音韻の認識を上げる活動が必要となる。子供の認知的発達理論から、形式的操作期である小学校 5,6 年生は、文字と音の関係の指導に適しており、文字と発音の関係を明示的に指導することの有効性が示唆された。本実践では、既に 2-5 年の英語学習歴がある小学校 5,6 年生に対し、集中的にフォニックス指導を行ったところ、音と文字の関係に興味を持ち、英語を読むことに意欲が湧き、英語を読むことが楽しいという意見が多く、小学校 5,6 年生へのフォニックス指導は有効であった。

文部科学省が掲げる「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方」では、小学校 5,6 年生から英語の教科化が計画されており、小学校 5,6 年生で英語の音と文字の関係を明示的に指導するフォニックスは必要であろう。また、小学校 5,6 年生でフォニックス指導を行うためには、小学校 3,4 年生での活動型の英語教育において、音韻認識能力を育てるための十分な英語のインプットと音韻認識能力を上げる活動を行うことが重要となる。これまでの日本の英語教育では、意味や形態のみが重視され、音声面での教育はおざなりにされてきた。小学校英語教育での音声教育は不可欠であり、小学校英語教育の教科化が進む中、音声教育の効果的な指導法の確立と拡充が重要である。

(名古屋外国語大学)

引用文献

- Adams, M. J. (2002). Alphabetic anxiety and explicit, systematic phonics instruction: A cognitive science perspective. In S. B. Neuman & D. K. Dickinson (Eds.), *Handbook of early literacy research*. New York: The Guilford Press.
- アレン玉井光江 (2012). 『小学校英語の教育法 理論と実践』大修館書店.

- アレン玉井光江 (2014). 「中学校の振り返りから見える小学校英語活動・有機的な小中連携のためのリテラシー指導」『日本児童英語教育学会』第 35 回全国大会.
- Heigham, J., & Croker, R. A. (2009). *Qualitative research in applied linguistics*. Hampshire, UK: Palgrave Macmillan.
- 市川力 (2012). 『英語を子供に教えるな』中央公論新社.
- 小池生夫 (1994). 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店.
- Mann, V. A. (1991). Phonological awareness and early reading ability: One perspective. In D. J. Sawyer, & B. J. Fox, (Eds.), *Phonological awareness in reading* (pp.191-215). New York: Springer-Verlag New York Inc.
- 文部科学省 (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実践計画」Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf
- 大岩晶子・赤塚麻里 (2011). 「初等教育における新しい機器を利用した英語教育研究--3 年間の実践と追跡調査を中心に(研究経過報告 1)」『英語音声学』日本英語音声学会.
- Piaget, J. (1973). *Main trends in psychology*. London: George Allen & Unwin.
- Stahl, S. A. (2002). Teaching phonics and phonological awareness. In S. B. Neuman & D. K. Dickinson (Eds.), *Handbook of early literacy research* (pp. 333-347). New York: The Guilford Press.
- Toi, S. (2013). Parents give kids early start in English. *The Japan Times*. Retrieved from <http://www.japantimes.co.jp/news/2013/07/10/>
- Wagner, R. K., & Torgesen, J. K. (1987). The nature of phonological processing and its casual role in the acquisition of reading skills. *Psychological Bulletin*, 101, 192-212.
- Yamami, Y. (2013). Is phonics instruction effective for fifth and sixth graders in Japan?: Action research. *Chukyo World Englishes*, 9, 1-8.